

連城亭隨筆

特別

14

696

179





師

九月二十一日

海州府

海州府

曾  
696  
179

在昔今日之縣以

新

河

掘井園

隨筆拾編卷之三



696  
179



連城耳隨筆 拾七編卷之二

愛智縣下

小寺山見地著

古今曆略說

抄本

皇朝曆法其甚詳考之尤為精也

初之考也 申其父際尚 史其後也

欽明天皇十五年 甲戌二月 制之始也 百海等

曆博士德王保孫之首也 其王之後 歷職也

惜也 武後四年 九年 推古天皇元年 壬戌正月

百海等之 治觀勅書 曆表及天文地理等

書之 抄本 德宗之所 所之 第年之 故也 初也





二二の書生とて是とてくはあつてむらひて書せし  
 傳ふもの後十八年とて後持統天皇四年唐高  
 宗始々元嘉曆劉宋文帝元嘉三十年十月癸未と用ひ  
 られ治儀鳳曆唐高宗儀鳳二年二月大史李淳風  
 と改めし後十七年とて後唐高宗天年丙子七年  
 癸卯八月改鳳曆を天曆と大行曆唐高宗天曆元  
 年丙子八月改天曆天皇天曆元年丙子とて後三年  
 の日大行曆とて天曆元年丙子七年癸卯とて九年  
 と兼用ひし天年丙子七年癸卯とて九年八年と  
 後三年唐高宗天曆元年丙子七年癸卯とて九年八年と

曆唐高宗天曆元年丙子と用ひし後元年とて後天  
 曆元年丙子七年癸卯とて九年八年と  
 都及び武江の七二載の表とて其中の日とて測  
 量し其法後時存元世宗聖元十八年辛巳とて中據と  
 し新曆を撰る者と賜る自言子曆天文生孫井とて  
 と号す本年とて後天曆元年丙子七年癸卯とて九年八年と  
 元年甲戌改曆を名とて天曆元年丙子七年癸卯とて九年八年と  
 洪別克前例改曆又六年とて後天曆元年丙子七年癸卯とて九年八年と  
 廿二甲戌曆を改補しとて九年八年と  
 五く少平年あり



竊謂本朝之文藝者其風俗之可觀者莫如漢之經注八明天啟の以  
 天史徐光啓西海圖志之類然其意の如何に新法を言ふに  
 宗廟禮制の行はれしを言ふに言ふに非ざるに解説瞭々たる  
 修治の羅正年皇朝製糖考成上下二篇の撰者あり  
 其法皆宗廟禮制の祖述よりあるに西洋の醫術の則て唐虞之法  
 の曆次者有る是は是は後世より又も西洋の新法を製糖  
 するに其術最善なり然るに實測の容を以て其書は乾隆  
 七年迄是は上下二篇の法皆糖考考成後編より今故に  
 所著の書は修治の實測の法東西里差及諸数の合者有用  
 といふは西洋の法は其の法甚善なり術も又も文の意あり

寛政九年丁巳十一月 本田芳信誌

寛政十戊午曆 朱書舊法 刻差四刻

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |  |  |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|--|--|
| 正月小<br>朔丙寅<br>廿二夜<br>廿三夜<br>廿四夜<br>廿五夜<br>廿六夜<br>廿七夜<br>廿八夜<br>廿九夜<br>三十夜 | 二月大<br>朔丙寅<br>廿二夜<br>廿三夜<br>廿四夜<br>廿五夜<br>廿六夜<br>廿七夜<br>廿八夜<br>廿九夜<br>三十夜 | 三月大<br>朔乙丑<br>廿二夜<br>廿三夜<br>廿四夜<br>廿五夜<br>廿六夜<br>廿七夜<br>廿八夜<br>廿九夜<br>三十夜 | 四月小<br>朔乙未<br>廿二夜<br>廿三夜<br>廿四夜<br>廿五夜<br>廿六夜<br>廿七夜<br>廿八夜<br>廿九夜<br>三十夜 | 五月大<br>朔甲子<br>廿二夜<br>廿三夜<br>廿四夜<br>廿五夜<br>廿六夜<br>廿七夜<br>廿八夜<br>廿九夜<br>三十夜 | 六月小<br>朔甲午<br>廿二夜<br>廿三夜<br>廿四夜<br>廿五夜<br>廿六夜<br>廿七夜<br>廿八夜<br>廿九夜<br>三十夜 | 七月小<br>朔癸亥<br>廿二夜<br>廿三夜<br>廿四夜<br>廿五夜<br>廿六夜<br>廿七夜<br>廿八夜<br>廿九夜<br>三十夜 | 八月大<br>朔壬戌<br>廿二夜<br>廿三夜<br>廿四夜<br>廿五夜<br>廿六夜<br>廿七夜<br>廿八夜<br>廿九夜<br>三十夜 | 九月小<br>朔壬辰<br>廿二夜<br>廿三夜<br>廿四夜<br>廿五夜<br>廿六夜<br>廿七夜<br>廿八夜<br>廿九夜<br>三十夜 | 十月大<br>朔辛卯<br>廿二夜<br>廿三夜<br>廿四夜<br>廿五夜<br>廿六夜<br>廿七夜<br>廿八夜<br>廿九夜<br>三十夜 | 十一月大<br>朔庚寅<br>廿二夜<br>廿三夜<br>廿四夜<br>廿五夜<br>廿六夜<br>廿七夜<br>廿八夜<br>廿九夜<br>三十夜 | 十二月大<br>朔己丑<br>廿二夜<br>廿三夜<br>廿四夜<br>廿五夜<br>廿六夜<br>廿七夜<br>廿八夜<br>廿九夜<br>三十夜 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|--|--|



去月

三月廿四日 亥時 卯月廿六日 辰時 卯月廿九日 申時 卯月三十日 子時

月食皆虧

四月廿四日 其日二刻 東方 酉時 酉時 酉時 酉時

日食皆少半

五月朔日 其日初刻 西方 酉時 酉時 酉時 酉時

月食長二分半

六月廿六日 其日初刻 東方 酉時 酉時 酉時 酉時

○ 市園和雄歌

草花あはれ 花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ

橋春片 角田の花えりの 花はあはれ 花はあはれ

花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ

花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ

花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ

花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ

花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ

花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ

花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ

花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ

花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ

花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ

花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ 花はあはれ



天啓  
重刊

おぼたけらるるもよき御書にありて天のはり

新刊

おぼたけらるるもよき御書にありて天のはり

書同

おぼたけらるるもよき御書にありて天のはり

十二社

おぼたけらるるもよき御書にありて天のはり

知の

おぼたけらるるもよき御書にありて天のはり

知の

おぼたけらるるもよき御書にありて天のはり

老

おぼたけらるるもよき御書にありて天のはり

或

おぼたけらるるもよき御書にありて天のはり

沙

おぼたけらるるもよき御書にありて天のはり

元

おぼたけらるるもよき御書にありて天のはり

火  
二十

馬鑑

或

伯

伯

伯

書

伯

伯

伯

伯

伯

伯

伯

伯

伯

伯

伯

伯

伯

温

温

温

温

温

温

温

温

温

温



○ 東外行のり天の重宝の移り松屋の

○ 御前の御書がけりかたの地獄の

○ 御前の御書がけりかたの地獄の

○ 御前の御書がけりかたの地獄の

○ 御前の御書がけりかたの地獄の

○ 御前の御書がけりかたの地獄の

○ 御前の御書がけりかたの地獄の

○ 御前の御書がけりかたの地獄の

○ 西河院入道風方殿の歌 少の言侍のまゝ

禁の危言 少の言侍のまゝ

諸のみのゆえにわが心は雪まじりぬ

齊思あふ

智恵をとりてまはるる御書がけりかたの地獄の

正統の御書

御前の御書がけりかたの地獄の

御前の御書

光の御書がけりかたの地獄の

○ 神前山御書



敬白記德不孝

新流流其法其德也

一 吾子可等流親子也其德也

一 對其方也其在味也

一 在坊方於德也 日本國也

大少中紙紙利夫天為天之家

一 傳其德也 記德也

文辭之氣也 記德也

其子之言

之其德也 記德也

○ 木林高雅 幼年之頃 結川之溪 學子之平後

初玉德別号三光也 南高亭 紫川亭 辨德

其後橫之乃藤傳也 向余所之物 子後其德也

通雀重所上之 酒肆井澤也 長共新和之内也

夫之同早一丁月西側也 移

子三人也 其德也 古渡之任 雅奇師 琵琶也

元治元年 子者月四日 數中 延也 元也 七十三

其德也 元也 大德也 元也 其德也 元也 七十三

其德也 元也 其德也 元也 其德也 元也 七十三



右明弟數多テ不相分テ覺テ思出テ爰

大畧是ハ平ノムカヒノ人ニテ有クハ其ノ人ナク

○山田玉鳳後改有道俗者全佳也

○安藤玉琴俗名八重所テ日修養者孫也

○野間玉冰俗名多治東造

○小出玉関執事奉行同心

○大野玉緒弟玉伊勢

○下田玉秀文政三年三月十三日

○堀江玉齋元治元年三月十三日

後東京下ノ歸木曾路ニテ病死

○服部玉兔俗名乃月秋夜樓

○天野玉山初水守増康長

天野小左天守

○安藤玉嶺天守

○小守玉虎廣路九左







初名  
通号  
若次房

高橋仙舟

滋物中來所贈高台橋波度(田原)

後慶作上好東京下(柳原種彦)川人(小)

種彦(年)後(柳)右(柳)二(月)柳(真)

秘渡玉陶

馬(真)氣(中)河(也)出(林)年(真)

渡馬玉亭

(註) (註)

石原玉圓

丸

林(年)真(子)

河原玉行女

前(注)年(九)年(原)

加茂玉路(大)大(國)回(十)同(辰)以(姓)

龜井玉壺

洋(注)玉(初)玉(晚)

某(名)者(子)以(玉)某(名)者(子)以(玉)某(名)者(子)以(玉)

某(名)者(子)以(玉)某(名)者(子)以(玉)某(名)者(子)以(玉)

求(不)玉(壽)

岩(向)騰(軒)

弟(方)真(子)

加(茂)松(園)

弟(二)傳(河)刺(刺)純(字)年(十)三(號)德(信)

女(田)出(水)坂

丹(羽)玉(舟)

信(注)年(真)弟(方)真(子)

交(共)集

交(共)集



○ 園 燒 芝 子 子 系

○ 塔 面 丸 外 上 自 神 聖 藥 塔 面 丸 外 上

○ 水 谷 菊 泉 北 國 紅 石 之 白 山 山 水

○ 石 橋 玉 橋 清 河 山 山 水

○ 小 澤 別 根 安 山 山 水 山 山 水

○ 水 野 玉 輝 塔 大 山 山 水

○ 山 谷 竹 屋 山 山 山 山 水

○ 長 尾 雅 善 山 山 山 山 水

○ 萩 原 玉 雪 山 山 山 山 水

○ 加 納 南 嶽 山 山 山 山 水

○ 山 本 玉 華 山 山 山 山 水

○ 本 村 山 山 山 山 水

○ 墨 文 山 山 山 山 水

○ 石 橋 玉 舟 山 山 山 山 水

○ 井 江 環 山 山 山 山 水

○ 玉 浦 玉 敷 山 山 山 山 水



○ 少年玉照

○ 崑崙仙樂

○ 大勝玉壽

○ 素琴九花

○ 清風玉照

○ 素琴九花

竹溪

西溪

○ 少年玉照



此の川家... 此の川家... 此の川家...  
 此の川家... 此の川家... 此の川家...  
 此の川家... 此の川家... 此の川家...  
 此の川家... 此の川家... 此の川家...

此の川家...

此の川家... 此の川家... 此の川家...

此の川家... 此の川家... 此の川家...

此の川家... 此の川家... 此の川家...

此の川家... 此の川家... 此の川家...

此の川家... 此の川家... 此の川家...

此の川家...







春

春のつゆの雨のちのけりし心のかき

つゆのちのけりし心のかき

水中のつゆのちのけりし心のかき

水の中

桂み

野子樹

つのおのちのけりし心のかき

つのおのちのけりし心のかき

つのおのちのけりし心のかき

つのおのちのけりし心のかき

つのおのちのけりし心のかき

つのおのちのけりし心のかき

つのおのちのけりし心のかき

つのおのちのけりし心のかき

つのおのちのけりし心のかき

つのおのちのけりし心のかき

つのおのちのけりし心のかき

つのおのちのけりし心のかき

つのおのちのけりし心のかき

つのおのちのけりし心のかき

つのおのちのけりし心のかき

つのおのちのけりし心のかき

つのおのちのけりし心のかき

つのおのちのけりし心のかき

つのおのちのけりし心のかき

つのおのちのけりし心のかき







不<sup>○</sup> 不<sup>○</sup>

山<sup>○</sup> 山<sup>○</sup>

元<sup>○</sup> 元<sup>○</sup>

春<sup>○</sup> 春<sup>○</sup>

冬<sup>○</sup> 冬<sup>○</sup>

夏<sup>○</sup> 夏<sup>○</sup>

秋<sup>○</sup> 秋<sup>○</sup>

冬<sup>○</sup> 冬<sup>○</sup>

心<sup>○</sup> 心<sup>○</sup>

八<sup>○</sup> 八<sup>○</sup>

心<sup>○</sup> 心<sup>○</sup>

心<sup>○</sup> 心<sup>○</sup>

心<sup>○</sup> 心<sup>○</sup>

心<sup>○</sup> 心<sup>○</sup>

心<sup>○</sup> 心<sup>○</sup>

心<sup>○</sup> 心<sup>○</sup>

細

梅

車

春

素

一

桂

不<sup>○</sup> 不<sup>○</sup>

山<sup>○</sup> 山<sup>○</sup>

元<sup>○</sup> 元<sup>○</sup>

春<sup>○</sup> 春<sup>○</sup>

冬<sup>○</sup> 冬<sup>○</sup>

夏<sup>○</sup> 夏<sup>○</sup>

秋<sup>○</sup> 秋<sup>○</sup>

冬<sup>○</sup> 冬<sup>○</sup>

心<sup>○</sup> 心<sup>○</sup>

八<sup>○</sup> 八<sup>○</sup>

心<sup>○</sup> 心<sup>○</sup>

心<sup>○</sup> 心<sup>○</sup>

心<sup>○</sup> 心<sup>○</sup>

心<sup>○</sup> 心<sup>○</sup>

心<sup>○</sup> 心<sup>○</sup>

心<sup>○</sup> 心<sup>○</sup>

細

梅

車

春

素

一

桂



○

にまゝのり

大原藩の日記  
大原藩の日記

文政

大原藩の日記

非

大原藩の日記

非

大原藩の日記

非

大原藩の日記

非

大原藩の日記

非

大原藩の日記

非

大原藩の日記

非

大原藩の日記

非

大原藩の日記

非

大原藩の日記

非

大原藩の日記

非

大原藩の日記

非

大原藩の日記

この書は...

大原藩の日記

大原藩の日記

大原藩の日記

大原藩の日記

大原藩の日記

大原藩の日記

大原藩の日記

大原藩の日記

大原藩の日記

大原藩の日記

大原藩の日記

大原藩の日記

大原藩の日記

大原藩の日記























○ 松の音の清く響く  
あはれ

○ 萩の葉の緑と白と  
あ

○ 凡の草の茂る中  
さ

○ 萩の葉の白く  
さ

○ 萩の葉の白く  
さ

○ 萩の葉の白く  
さ

○ 萩の葉の白く  
さ

萩の葉の白く  
さ

○ 萩の葉の白く  
さ

○ 萩の葉の白く  
さ

○ 萩の葉の白く  
さ

○ 萩の葉の白く  
さ

○ 萩の葉の白く  
さ

○ 萩の葉の白く  
さ

○ 萩の葉の白く  
さ























後園  
の  
松  
の  
木  
の  
葉  
の  
色  
の  
変  
化  
の  
事  
を  
記  
す

十四日  
十三日  
十二日  
十一日  
十日  
九日  
八日  
七日  
六日  
五日  
四日  
三日

松の葉の色は、  
初秋は青々として、  
次第に黄ばき、  
やがて赤く染まる。  
此の松は、  
秋の深まるにつれて、  
葉の縁が赤く、  
中心部は黄ばく、  
美しい紅葉を呈する。  
此の松の葉は、  
冬になると、  
白く染まる。  
此の松の葉は、  
春になると、  
再び青々として、  
生長する。

新葉の生長は、  
初春は遅く、  
次第に速くなり、  
やがて新葉が、  
老葉を置き、  
生長する。  
此の新葉は、  
夏になると、  
赤く染まる。  
此の新葉は、  
秋になると、  
黄ばく、  
やがて赤く染まる。  
此の新葉は、  
冬になると、  
白く染まる。  
此の新葉は、  
春になると、  
再び青々として、  
生長する。























今度も来た大勢城の赤いおん

取首の志の事

落葉の川舟の歌

月夜に舟をこぎて

○弘化三年丙午四月廿九日

三石 四石 五石 六石 七石 八石 九石 十石

十一石 十二石 十三石 十四石 十五石 十六石 十七石 十八石

十九石 二十石 二十一石 二十二石 二十三石 二十四石 二十五石 二十六石

二十七石 二十八石 二十九石 三十石 三十一石 三十二石 三十三石 三十四石







心水  
神妙救法

前集卷之二

人  
岩塔

百卷  
天宮院

百卷  
竹園

百卷  
覺

百卷  
覺

百卷  
覺

六  
略

井上

年  
別

字  
依

澤

武

大

元

卷之二

卷之二



十月廿五日

田川

水

川

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水



















長坂信正

吉屋久吉

江川大進

折尾新八

吉野重吉

吉野重吉

吉野重吉

吉野重吉

吉野重吉

吉野重吉

吉野重吉

吉野重吉

吉野重吉

吉野重吉

吉野重吉

吉野重吉

三務七郎

吉野重吉

吉野重吉

吉野重吉

吉野重吉

吉野重吉

吉野重吉

吉野重吉

吉野重吉







山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序

山内自序



檉シロギク 檉シロギク 檉シロギク  
檉シロギク 檉シロギク 檉シロギク

檉シロギク 檉シロギク 檉シロギク  
檉シロギク 檉シロギク 檉シロギク  
檉シロギク 檉シロギク 檉シロギク  
檉シロギク 檉シロギク 檉シロギク

○ 喜蘭草 世俗辟邪草 ケラ花 又之 波蕨草

吉祥草 一名 觀音草

曼陀羅花 テラセニアサリホ

○ 芍薬 芍薬 シロクシ 芍薬 シロクシ 芍薬 シロクシ

○ 芍薬 芍薬 シロクシ 芍薬 シロクシ

芍薬 シロクシ 芍薬 シロクシ 芍薬 シロクシ  
芍薬 シロクシ 芍薬 シロクシ 芍薬 シロクシ  
芍薬 シロクシ 芍薬 シロクシ 芍薬 シロクシ



皇太子孫知本

海内云

この川にさして瀬さきれ然るをいふは  
あまのつげの神のちをさす

後長云

この川水さうがふは秋風

とほまふとて早と谷のえ

西村徳義

○ 浮あふりかみむらさき

あふりかみのむらさき

浮きあふりかみのむらさき

いふに西を吹かす



新里山四地盤

新里山四地盤  
新里山四地盤  
新里山四地盤

新里山四地盤  
新里山四地盤





